

布一

2. 第6回行動の研究会—aggressive behavior—
3. 第1回霊長類の系統進化と周辺科学
4. 第3回生殖生理に関するシンポジウム
5. 第4回脳と行動研究会—記憶のメカニズムについて—
6. ニホンザル地域個体群に関する研究会
7. 第7回ホミニゼーション研究会

8. 第4回霊長類タンパク質の構造・機能・進化
9. 第4回ロコモーション・ワーキング・グループ研究会

以上の共同研究、研究会に使用された費用は、研究員等旅費673.5万円、校費273万円であった。これらは応募者が申請した必要額の半分にも達しない額であり、共同利用研究活動の発展のためには大巾な増額が要望される。(室伏靖子)

2. 研究成果

設定課題 1 ニホンザル地域個体群の研究

下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林植生と森林施業

荻野 和彦(京大・農)

下北半島のブナ・ヒバ林がニホンザルの生息環境として、どのような植生構造をもち、森林施業が植生にどのような影響をおよぼすのかを調べるため、継続調査をおこなった。

1976年には、11月に現地調査を実施した。調査地域は下北郡大畑町、大間町、佐井村にまたがった国有林である。

現在までに9コの永久調査プロット(1プロットの面積は1600m²)が設置されている。その配置は必ずしもニホンザルの生息域にとらわれることなく、調査地域全体の植生構造をひろくおおうよう配慮した。施業の種類によって、無施業、ブナ択伐、ブナ漸伐、ヒバ択伐などの施業辺からプロットは選ばれている。

プロット設置後の経過年数についてみると、3年経過したものが4プロット、2年経過したものが4プロットである。1プロットは1976年度に新しく設置したもので、特に大間営林署管内7林班の奥戸川流域、コロピ石沢付近のニホンザルの泊り場付近に選んだものである。

新設のプロットについては、他のプロットと同じく、全立木の樹冠投影図を描き、林冠の階層構造を記録するとともに、胸高直径、樹高を測定した。胸高位置は白ペンキで印をつけ、継続調査にそなえることとした。

既設のプロットにおけるくりかえし測定の結果は、2年経過プロットでは単木的には生長量の算出可能な個体がみとめられるにもかかわらず、測定誤差が大きく林分値をもとめるには、なお精度が不十分であるように思われる。3年経過プロットについても、林分値をもとめるには、なお精度が十分でないきらいがある。さらに調査を継続して、生長量をもとめるためのデータを蓄積する必要がある。

ニホンザル地域個体群間の非計測的特徴による変異性の研究

山極 寿一(京大・理)

目的：生体にみられる非計測的特徴の比較を行ない、ニホンザルの種内変異の実態と地域個体群間の類縁関係を明らかにする。

方法：1) 調査地は個体への接近可能な餌づけ群をもつ屋久島、幸島、高崎山、小豆島、嵐山、箱根、房総、地獄谷、下北とした。2) 観察項目は変異性が明確であり、季節等の変化を受けず、観察のし易いもの48項目を選出し、判定基準を設定した。3) 2)によりチェック・リストを作成し、1)の地域で捕獲によることなしに調査を進めた。(個体識別のされていない場合は、観察個体の重複を避けるために調査個体の性・年齢を定め、一定時間一定空間でのチェックを行ない、同条件の観察は一回限りとした。)4) 3)で得られた資料を、地域、性、年齢、家系のわかるものは家系ごとに頻度をとって、各形質の出現傾向を調べた(この分析は現在も続行中である)。5) 地理的変異を出すために、各形質の判定基準を有・無の二つに整理してその頻度を取り、相関のあるものはそのうちの一つを採択した。6) 5)で得られた頻度をSmithの式 $\Sigma(\theta_1 - \theta_2)^2 / N - (1/n_1 + 1/n_2)$ に入れ、各集団間の距離を算出した。

結果と考察：1) 毛に関する10変異形質は、各生息地の気候とはほぼ平行した変化を見る事ができ、気候とこれらの形質との間の相関を推定する事ができる。2) 1)以外の変異形質によって集団間の距離を算出すると、a)高崎山、嵐山、湯河原は互いに非常に近く、類似の変異の傾向を持っている。b)小豆島は変異の幅が小さく、島嶼的傾向がみられるがa)にあげた集団に比較的近い。

c)幸島も島嶼的傾向が顕著にみられ、各集団と遠い距離にある。b)屋久島は他集団から最も遠く離れ、変異傾向も極端な位置を占める事が多いが、他方同質の変異